



Title	J/Y -ジュノ・ディアスと変身の願望-
Author(s)	旦, 敬介
Citation	文芸研究, 132: (69)-(75)
URL	http://hdl.handle.net/10291/18827
Rights	
Issue Date	2017-03-26
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

J/Y

— ジュノ・ディアスと変身の願望 —

旦 敬 介

西アフリカから奴隷としてブラジルに連れていかれ、そこで数十年奴隷として働いたのちに自由の身を回復し、一九世紀の半ば以降にアフリカ（現在のナイジェリアやベナン共和国など）にもどった一群の人たちがいる。万人ほどいたのではないかと見られるこの「ブラジル帰還人」は、帰還先で地元の人から「ブラジル人」と呼ばれたり、自分たちでそう自称したりして、元からの地元人とは区別される独自のコミュニティを形成することになった。現在でもその子孫の人たちは、ブラジル人を名乗り、ブラジル由来の苗字を使い、ブラジルの風俗や宗教儀礼を維持している場合がある。

しかし、少し考えてみればわかるように、彼らはブラジルに一時的に滞在してから「帰還」した人たちであり、もともとはブラジル人ではなくアフリカ人だった人たちだ。しかも、苦勞して奴隷の身分を脱したのち、大西洋横断船の運賃など多大な費用を負担してアフリカにもどることを選んだほどなのだから、彼らはブラジルの元奴隷たちの中でも特別にアフリカ人意識が強かった人たちだったと想像できる。アフリカを忘れず、自分のことをアフリカ人として意識し続け、現に暮らしていたブラジルに同化するのを拒んだ人たちだった可能性がある。

ところが、異国で長く暮らすうちに大きく異なった思想や生活習慣を身につけていた彼らは、帰還後、同民族の仲間からも外国人扱いされ、場合によっては排斥されて、結局、本人たちも「ブラジル人」を名乗って、地元民と自分たちを区別するようになったのだった。

また、興味深いことに、現在このようにして西アフリカで「ブラジル人」を名乗っている人たちの中には、ブラジル帰還人の家で働く奴隷であったり使用人であったりした人やその子孫も含まれている。彼らは一度も故郷を離

れていないアフリカ人なのだが、なんらかの理由で意図的に主人のアイデンティティをまとうようになったのである。

このように人のアイデンティティというのは、けっして固定的なものではなく、本質的な根拠に基づくものでもなく、行動の過程において、かなり融通無碍に変容していくものであることをブラジル帰還人の例は教えてくれる。生まれながらの自分ではないものになりかわってしまいたい、という変身願望も人間にとって自然なものなのだろう。

*

そのような問題を考えていくうちに、気になってきた作家にドミニカ共和国出身のジュノ・ディアスがいる。と書いたところですでにいくつもの注釈をつけなければならなくなるのがこの作家の現代地球的なところで、多少の迂回が必要になる。

ジュノ・ディアスは Junot Díaz と書くから、名前の部分はスペイン語として順当に読めば「フノッ」という音になるはずだが、スペイン語としてはきわめて異例の名前だから、そう読むのがためらわれるのか、一昨年、本人が日本に来て講演したときには、その会を主催したドミニカ共和国大使館の人たちは「ユノッ」という音で呼んで紹介していた。また、カリブ海のスペイン語には基本的に「ジュ」という音は存在しないので、英語圏で呼ばれているように「ジュノー」ないし「ジュノッ」と発音できないことも関係しているかもしれない。いずれにせよ、「ジュノ」という呼び名は明らかに英語読みのものであり、ドミニカ共和国人の間で通用しているものではない。

ではなぜジュノ・ディアスと日本で紹介されているのかといえば、それは彼が英語で作品を書いて、アメリカ合衆国で出版しているからだ。英語で書く作家であるから、名前も英語ふうを読むのが当たり前だ、米国のマスコミで呼ばれている呼び方を採用するのが当たり前だと考えられたわけだろう。

なぜドミニカ共和国出身なのに英語で書いているのかといえば、彼が小学校に入る前後にアメリカ合衆国に移住した人だからだ。アメリカ合衆国で学校に行きはじめて彼にとって、文字として読んだり書いたりする言語は、最初から英語だったのだ。彼は結局、米国の大学でクリエイティブ・ライティングで修士号を取るところまで教育を受け、その途中で米国の英語の雑誌に作品を発表しはじめ、英語の作家になった。

しかし、彼の書く作品は頻繁にスペイン語の単語やフレーズや台詞が注釈なしに差しはさまれるところに大きな特徴があり、純然たる英語で書かれて

いるとは言えない。そこがたとえば、カズオ・イングロなどとはだいぶ違ってくる。ディアスの作品はスペイン語の心得がまったくない英語読者には意味がわからない部分がたくさんある文章のはずだが、ニューヨークやカリフォルニアなど、スペイン語人口が多い地域でスペイン語話者と接触の経験がある読者にはある程度、意味を推定できる部分があるはずで、そのように英語の構文を根本的にはこわさずに適切なあんばいの語彙レベルでのみスペイン語を混ぜこんでいるのが、英語の作家として彼が受け入れられ、代表作『オスカー・ワオの短く凄まじい人生』でピューリッツァー賞を受賞するほどにまで成功した巧みなところだったのだろう。

*

だが、ジュノ（ユノ）・ディアスの作品の内容を見ていくと、その主要登場人物は全員が全員、ドミニカ共和国人か、ドミニカ共和国出身で米国に住んでいる人たちに限られる。作家自身の育った場所であるニュージャージー州が舞台になっている場合が多いが、『オスカー・ワオ……』を含めて、どの作品もドミニカ共和国出身者コミュニティの人間たちの物語であり、それ以外のアングロ系米国人（ラティーノでない米国人）はほとんど出てこない。彼らは家族関係と恋愛関係を通じて、かなり強固で、閉鎖的なドミニカ共和国出身者コミュニティを形成して自足しているようなのだ。

では、彼ら登場人物たちはいったい何語をどのようにしゃべっているのだろうか。作品に書かれている通りの、要所にスペイン語の交じる英語をしゃべっていると解釈すべきなのだろうか。それとも、本当は全部スペイン語で話していて、語り手がそれを英語に翻訳して読者に提示していて、しかし、それが本来は英語ではなかったことを適宜思い出させるように、要所要所に、翻訳しにくいニュアンスをもったスペイン語のキーワードを残しておいたのだろうか。あるいは、ときと場合に応じて、その両方のケースがあるのだろうか。

登場人物たちがドミニカ共和国に住んでいた時代の話もあり、一時的に訪問したりする作品や場面もある。その場面においては、当然すべてがスペイン語で発話されているはずだが、作品内では、ニュージャージーの場面と同じようにスペイン語交じりの英語の台詞が書かれているので、そこから考えて、登場人物たちが作品内の台詞を、書かれている通りにそのまま英語で話していると考えるのは不適切だとわかる。だからむしろ逆に、彼らは基本的に、米国内にいても大部分の台詞をスペイン語で話している人たちだ

と想定したほうがよいのだろう。ただし、スペイン語がそれほど得意でないことを告白する人物も出てくるので事情はけっして単純でない。

ジュノ・ディアス本人もまた、日本での講演会に際して（そのときの講演言語はスペイン語だった）、質疑応答の過程で、スペイン語での正確な表現の選択において困難をおぼえることがあると述べていたことから、スペイン語は日常的な口語表現の言語としては完璧に使いこなせて、もっとも親密な言語であったとしても、厳密な話や知的な話になると英語のほうがうまく使えるというような場面があることがうかがえた。

その一方で、デビュー作となった短篇集『溺れる』の巻頭には、キューバ出身の英語作家ペレス・フィルマットの詩の一節——「英語で書いているということ自体が私の言いたいことをすでに裏切っている」、「私は英語に所属してはいないが、かといって他のどこにもまた所属していない」——が掲げられて、英語で書くことがけっして必然の選択ではないことが示されてもいる。

*

ところで、ジュノ・ディアスがくりかえし利用する登場人物兼語り手の「Yunior」（ほとんどの作品がこの人物を語り手としている）だが、これはもちろん英語の Junior を借用した英語風の名前なのだから、スペイン語話者であってもそれを「ジュニア—」に近い発音で言いたいわけだが、「ジュ」という音はスペイン語にはなく、したがって「ジュ」という音を表記する綴り字もない。かろうじてそれに近いのが Y の文字であり、これは本来は「ヤ・ユ・ヨ」の音をあらわすが、それを少し強く発音すれば「ジャ・ジュ・ジョ」という音にだいぶ近くなる。そこでスペイン語ふうの Junior と言ったときの「ユニオル」ないし「ジュニオル」という音声を文字として再現しようとしたのが Yunior という表記のはずだ。文字よりも音のほうが先にあった名前なのだ。

この Y と J の微妙な互換性の問題が、作家自身の名前にもかかっていることはすでに述べた通りだ。つまり、この語り手と作者とは、名前において、同じ音声上の両義性ないし曖昧さを共有しており、作者がこの人物と部分的には同一視されることは名前において公言されているといえる。

*

ジュノ・ディアスの作品に出てくる人たちは、そして語り手たちは、このように、アメリカ合衆国に暮らしているながら、ほぼドミニカ共和国人コミュ

ニティの中だけで、スペイン語の中だけで暮らしている人たちだ。それ以外のコミュニティとの接触もあるのだろうが（たとえば彼らの一部は大学に行ったりする）、人生のその部分についてはほとんど言及されない。つまり彼らの人生の中で意味のある部分だとは作品内で見なされていないのだ。また、彼らが自分のことをアメリカ合衆国人であると見なしているようなそぶりを見せることもない。主流的なアメリカ合衆国人のことを彼らは「グリngo」と呼んだりしているのだから、自分らは明らかに「グリngo」ではないとらえているのだ。「グリngo」が彼らの仲間になることはないし、彼らの側も「グリngo」の社会に同化して積極的にその一員になろうと努めたり願望したりしている様子はない。

つまり彼らは、生得的な分類区分を逸脱・侵犯して別のものになろう、別の社会集団のメンバーになろう、そう見なされようとする行動とは無縁に見える。

アフリカ系アメリカ合衆国人をめぐる文学では、混血により「白人」として「通用する」肌の色や容貌をもって生まれた人物が、人種の分類区分を越境して、不利益の多い「黒人」ではなく、主流社会に属する「白人」として生きることを選ぶ、人種的な「パッシング」passingの主題がしばしば扱われたが、ディアスの作品内ではそれはしないのだ。冒頭で述べた「ブラジル帰還人」のアイデンティティの転換も、アフリカ人がブラジル人になりかわる一種のパッシングの例だったわけだが、ユノ・ディアスの世界にはそのような変身願望はあらわれない。

ここで、語り手のジュニオルをはじめ、主人公級の人物がいずれも黒人（系）であると設定されていることは状況をさらに複雑にしている。彼らは、ドミニカ共和国人社会の中でも、白人系のラティーノたちからは社会的に一ランク低い階層と見なされている。一方、「グリngo」社会の側からは、「ヒスパニック」（米国の主流社会の側がラテンアメリカ人系住民を呼ぶ呼称）集団の中に所属しているものとも見なされてなく、かといっていわゆるアメリカ黒人、アフリカン・アメリカン集団のメンバーでもなく、いわば名前のない集団をなしている。名前がないとは、存在していることが認知されていないということだ。このようにユノ・ディアスの主人公たちは、いちばん目につきにくく、いちばんとらえにくい人たちであり、分類区分すらあたえられていない。

このような幾重にもなった不利の中にあっても、彼ら黒人系ドミニカ共和

国人たちが、「ドミニカーノ」、「キスケヤーノ」（ドミニカ共和国人が自らの土着性をとくに強調して身内性を確認するために使う呼称）や「ラティーノ」であることをやめて、別のものとして生きていくという願望や行動が描かれることはない。彼らはパッシングをしない。ところが、その彼らが別のものになる機会がある。ドミニカ共和国に一時帰国すると彼ら自身が、元からの地元人からは「グリング」と呼ばれることになるのだ。ちょうど、西アフリカに帰還した人たちが「ブラジル人」と呼ばれたのと同じように。

*

ジュノ・ディアスのこれまでの唯一の長篇作品は『オスカー・ワオの短く凄まじい人生』と日本語には翻訳されているが、原題は *The Brief Wondrous Life of Oscar Wao* である。主人公オスカー（正しくは「オスカル」だろう）は語り手以外のほぼ誰からもその真価を認めてもらえない不幸な人生を送り、結末においては、激しい暴力に見舞われた凄まじい死に方をする。その側面を重視してこのような日本語題名がつけられたのだろうが、やはりこれは明らかに誤りだと言わなければならない。*Wondrous Life* はもちろん、「(魅惑に満ちた) 素晴らしい人生」である。

そのことはこの題名が、そしてこの作品が、ヘミングウェイの短篇「フランシス・マカンバーの短く幸福な人生」*The Short Happy Life of Francis Macomber* を下敷きにしていることを考えれば明らかになる。ヘミングウェイの作品では、意気地のない男として妻に見下され続け、沓えたところのない人生を生きてきた主人公が、死の直前の数時間だけ変身し、完全な勇気を手に入れ、完全に自立した人間となって、完璧に幸福な人生を生きることができた。それとまったく同じ構造がオスカル・ワオにあてはまる。彼もまた人生の最後の数日間だけ、ある種の変身をなし遂げて、完璧に素晴らしい人生を送るのである。

*

ここで扱ったいくつかの主題は、たとえばアディーチェやブラワヨといったアフリカ出身で外国に住み、英語で書き、主に米国で出版している作家たちとの比較において、より多面的に語れるのではないか。

参考文献

Junot Díaz: *Drown*, 1996, New York

- : *The Brief Wondrous Life of Oscar Wao*, 2007, New York
- : *This Is How You Lose Her*, 2012, New York
- ジュノ・ディアス『オスカー・ワオの短く凄まじい人生』. 2011年, 新潮社
- 旦敬介「環大西洋コミュニティ — ブラジル帰還人の世界 —」, 『神奈川大学評論』
76号所収, 2013年